

## 東大寺文書の形成と伝来に関する基礎的研究

森, 哲也

<https://hdl.handle.net/2324/1500436>

---

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 論文博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2,3）

論文題目

東大寺文書の形成と伝来に関する基礎的研究

氏名 森 哲 也

**論 文 内 容 の 要 旨**

東大寺文書の形成と伝来に関する基礎的研究

日本史の叙述にあたり、古文書が重要な史料の一群であることは論をまたないが、正史、律令格式が国家の立場で編纂されていることを想起すれば、文書についても、文書群を総体として把握し、それがいかなる基準で形成・保管され現在まで伝来してきたかを明らかにする必要がある。しかし現状では、文書群の通史的把握について不十分と考えられる。そこで本論文では、日本における大文書群の一つ、東大寺文書を分析対象とし、その形成から現在に至るまでを射程に入れつつ基礎的研究を行った。具体的には、東大寺印蔵保管文書の伝存、活用の状況、荘園・末寺支配との関係の解明を行い、東大寺末寺である筑紫観世音寺の文書についても、東大寺文書中の小文書群として取り上げ、基礎的考察を加えたが、その考察結果を摘記すれば、以下のようなになる。

第一部において前者の課題に取り組み、第一章では、東大寺別当寛信による文書整理（第一～五の公驗唐櫃等）を反映し、印蔵保管文書の台帳としての性格をもつ仁平三年目録に関し、原本調査の成果等に依拠しつつ、その改訂が末寺観世音寺の支配と関わることを指摘するとともに、印蔵における具体的な文書保管のありかたにも言及した。また、掲載文書の具体的比定を踏まえ、残存率が高く奈良時代のものがほとんどを占める荘園の文書は、公驗としての効力に対する期待は否定できないものの、むしろ歴史的由緒の古さに重点が置かれ保存が図られたとの見通しを示した。

第二章では、印蔵保管文書の動態を示す文書出納日記の分析に取り組み、出納日記の全体像を示した上で、具体的な掲載文書の比定等、復原的考察を行った。その成果によりながら、出納日記の書式の変遷、題籤をもつ往来軸と別当との関係、出納に立ち会った僧侶の立場等を明

らかにし、保管文書が寺外・寺内に対する証拠書類として機能したこと、荘園経営との関係、出納日記の終焉が公驗としての効力を発揮する場の喪失と関わると考えられること、等を指摘し、さらに出納日記の開始、終焉と時代区分との関係についても言及した。第一章で関説した文書残存率の高い荘園については、出納の機会がきわめて少なかった点を確認し、第一章での推測を裏付けた。

その後の東大寺文書の様相について、第三章で点検記録を主たる素材として分析を加え、近世～近代における東南院文書、東大寺文書の現状成立過程を明らかにし、後者の状況に関しては第三章附論でさらに補足を加えた。

正倉院文書研究における写本の重要性と同様に、東大寺文書研究においても、写本のもつ意義には大きなものがあり、現在所在が確認できない史料、新出史料を通じた研究の進展が期待される。こうした観点から、第四章では、平安期の正倉院の歴史を物語る史料を写本から検出し、明治初頭における東大寺文書の状況や、国学者・好古家の知のネットワークの解明という、日本近世～近代史学史の研究にも資することを指摘した。

第二部は後者の観世音寺文書を主題とするものである。第一章で各種文書目録、出納日記と現存文書を対照させつつ、文書群としての全体像把握と基礎的考察に努め、印蔵からの出納を分析することにより、東大寺による末寺・寺領支配の動向を浮かび上がらせる点を指摘したが、これは第一部第二章の結論を支持するものである。

第二章では、文書目録に見えながらも、内容が未確認であった観世音寺公驗案の抄出、これまで不明であった文書の日付や接続関係を明確にできる新出史料について考察を加えた。これは、第一部第四章と同様に写本研究の有効性を示すものであり、本章附論においても、非東大寺系の僧が観世音寺別当となった際の、東大寺の対応等が知られる写本史料を紹介したが、それによって知られる末寺観世音寺に対する東大寺の関心の高さは、第一部第一章、第二部第一章の考察結果と符合するものである。

第三章は、個別文書研究の一環として、後世の写しとされてきた『観世音寺資財帳案』が未完成の原本であることを明らかにし、寺領支配に直結しない内容の、未完成の原本であるにもかかわらず、東大寺において寺領支配に関わる公驗とともに伝えられたことは、財源としての末寺観世音寺に対する、東大寺の強い姿勢の現れと理解できることを述べた。

第四章も個別研究として、これまで学界で議論されてきた「延喜の奴婢停止令」の内容、時期等が、観世音寺公驗案の記載から分析できることを明らかにした。

第五章、同附論は、近世～近代における観世音寺文書の状況、東大寺外に流出し現在に至る過程を追跡し、伝来過程に関係した人物等、その歴史的背景について考察を加えた。

以上の成果を踏まえつつ、文書の本質的効力は院政期に再認識され、より重要視される時期を迎えたが、その後、効力を発揮する場が失われると、各時代の社会の必要に応じた価値が付与されていくのではないか、との見通しを示した。